

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 21 日現在

機関番号：82404

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26750216

研究課題名(和文)成人吃音の包括的評価法と治療・支援法に関する研究

研究課題名(英文)Development of comprehensive assessment and support for adults who stutter

研究代表者

酒井 奈緒美(Sakai, Naomi)

国立障害者リハビリテーションセンター(研究所)・研究所 感覚機能系障害研究部・研究員

研究者番号：60415362

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：成人吃音の包括的評価法を確立するために、(1)面接調査に基づく質問紙(NBAS)の開発、(2)海外既存の質問紙の日本語版(OASES-A-J)の作成・標準化を行なった。両質問紙を吃音のある成人118名を対象に実施した結果、成人期以前の、いじめ・からかいへの支援、自助グループの紹介、何かに打ち込める経験のサポートが、成人期における吃音による困難度を軽減しうる可能性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：For the purpose of establishing comprehensive evaluation method of adult who stutter, I conducted (1) development of questionnaire based on interview survey (NBAS) and (2) translation into Japanese and standardization in Japanese people who stutter about Overall Assessment of Speaker's Experience of Stuttering for Adults (OASES-A). As the results of conducting these questionnaires for 118 adults who stutter, it was shown that some supports before adulthood, such as protecting from bullying and teasing, introduction to self-help group, and supporting for their experience to devote themselves into something, might reduce the difficulties on stuttering in adulthood.

研究分野：言語聴覚療法

キーワード：吃音 成人 評価 質問紙 支援

1. 研究開始当初の背景

(1) 吃音とは

発達性吃音は、幼児期に発症率5%で見られる発話障害の一つであり、詳細な原因と病態は未だ不明である。その7~8割は成長とともに治癒・回復すると言われている(Yairi & Ambrose, 2005; Mansson, 2000)が、成人期まで残存する者も存在し、成人における吃音の有病率は約1%である。成人吃音者は、長年にわたり発話の失敗経験を重ねた結果、吃音、さらには発話への恐れなどの心理的反応や、発話の回避などの二次的問題を抱えている。これらの問題は発話症状そのものよりも大きな問題となって吃音者の対人関係や社会参加に影響を及ぼし、自己効力感と生活の質(QOL)を低下させている。

(2) 吃音の評価法とその問題点

吃音の問題の評価においては、近年、全ての側面を包括的に捉える評価概念が世界的にも一般的になっており、評価にCognitive, Affective, Linguistic, Motor, Socialの5つの観点を取り入れるCALMSモデル(Healey, 2004)や国際生活機能分類(International Classification of Functioning, Disability and Health; ICF(WHO, 2001))の考えに基づいて包括的に吃音を評価する質問紙(Yaruss & Quesal, 2010)なども存在する。しかし、日本には成人吃音の問題を包括的に捉える評価法が存在しない。

(3) 吃音の治療・支援法とその問題点

吃音の治療には発話面へのアプローチを中心としつつ、吃音にまつわる感情や態度も扱っていくような統合的アプローチ(integrated approach)が一般的になっている(Guitar, 2006)。近年、吃音と社交不安障害の関係が報告される(Packman & Onslow, 2009; Iverach et al., 2011)のと同時に、成人の吃音の問題は発話症状そのものよりも本人の吃音に対する感情や考え方、また吃音を避けようとする行動面に存在することが改めて注目されるようになり、心理療法である認知行動療法を発話の直接的訓練と組み合わせた吃音の治療研究(Menzies et al., 2009; Beilby et al., 2012)が見られるようになってきた。日本でも吃音と社交不安との関連が報告されつつあるが(吉澤ら, 2013; 菊池ら, 2013)、その支援は海外の数少ないエビデンスに頼りながらの手探り状態である。日本においても吃音の包括的な支援に関するエビデンスを蓄積し、支援法を確立させる必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、QOLのような当事者の生活全般に及ぶ吃音の影響を軽減する吃音治療・支援法を日本において普及させることを目的とする。そのために、(1)成人の吃音を、発話症状、心理・認知、社会参加など多側面から、

包括的に評価する方法を確立すること、(2)その評価法に基づき、科学的根拠を有する治療法・支援法を確立することを目標とする。

3. 研究の方法

<成人吃音の評価法確立の研究>

(1)吃音のある成人への面接調査より、成人吃音の問題の一端を示した研究(酒井・森, 2013)に基づいて、吃音の問題を包括的に捉える質問紙(試案)を作成する。

(2)質問紙(試案)を20名程度の吃音のある成人に実施する(予備調査)。質問紙の結果が支援法の選択・決定の一資料となりうるかを検討するため、対象者のクラスタ分析を実施する。

(3)予備調査の結果に基づき、調査用紙を修正し、再度吃音のある/ない成人を対象に質問紙を実施する。回答結果に基づき、項目分析や信頼性・妥当性の検討を行う。質問紙(最終版; a narrative-based assessment tool for stuttering (NBAS))を完成させる。

(4)日本独自の評価法の開発と並行して、海外と同様の基準で吃音の問題を評価するために、海外で広く使用されている既存の質問紙(Overall Assessment of Speaker's Experience of Stuttering; OASES, Yaruss & Quesal, 2010)の日本語版の作成を行う。

<成人吃音の治療・支援法確立の研究>

(1)現在国内外で報告されている治療・支援法を整理する。

その後、NBASの結果を元に、治療・支援法の決定・実施を行い、その介入効果の評価を行う予定であったが、介入の進捗状況や症例の個人的事情により、研究期間中に介入効果の分析まで到達しないという問題が浮上した。問題解決のために、介入内容をパッケージ化した短期のグループセラピーの実施において、NBASを実施し、その回答傾向と介入効果の関連を調べようと試みたが、これも対象者9名の回答が類似する、全員に介入効果が認められた、という結果に終わった。そこで、以下の通り方法を変更した。

(2)NBASにおける過去の経験に関する質問と、OASES-A-J(現在の吃音による困難さ)との関連を明らかにし、成人期以前の望ましい支援について検討する。

4. 研究成果

<成人吃音の評価法確立の研究>

(1)酒井・森(2013)に基づき、全113項目から成る質問紙(試案)を作成した。

(2)質問紙(試案)を20名の吃音のある成人に対し実施した。4セクションの得点傾向が

ら対象者を群分けするために、クラスタ分析を行った結果、4つのクラスタに分類された。クラスタごとの各セクション得点の平均プロフィールを作成したところ、I群は全般的に困難度が高い群、II群は特定の場面で症状が顕著な群、III群は困難度が軽度で比較的適応している群、IV群は回避により生活上の困難を感じている群と推測された。この結果から、評価法試案は、吃音のある成人を発話、心理、行動、社会参加等の総合評価によって下位分類できることが示され、それをもって支援法の選択補助ツールとして機能し得ると判断した。

(3) 修正を行った改訂版(全123項目)を116名の吃音のある成人を対象に実施した。有効回答数102のデータに関し、各下位セクションにおける信頼性係数(係数)を算出したところ16の下位セクション中13下位セクションにおいて、 > 0.7 となり内的整合性が確認された。さらに、再テスト法による信頼性の確認、併存的妥当性や構成概念的妥当性の検討を行った。再テスト法の施行間の相関は、各セクションにおいて $r = 0.67 \sim 0.89$ となり、概ね信頼性があると判断された。妥当性については、質問紙の各セクションが改訂版エリクソン・コミュニケーション態度尺度(S-24, Andrews & Cutler, 1974)や自身の発話に対する10段階評価(SAスコア, Huinck & Rietveld, 2007)と有意に相関していること($r = 0.4 \sim 0.82$)、また、セクション間の相関よりセクション内の内的整合性が高い値を示していることを示し、併存的妥当性、構成概念的妥当性を確認した。内的整合性が低かった下位セクション($r = 0.44$)については、別のセクションへ項目を移すなどの調整を行い、臨床場面にて実施可能な形とした。

(4) 翻訳、逆翻訳、著者との協議の順で作業を進め、日本語版 OASES-A (OASES-A-J) を作成した。吃音のある成人200人を対象に OASES-A-J 実施し、信頼性・妥当性の検討を行った。各下位セクションにおける信頼性係数(係数)を算出したところ、 $r = 0.80 \sim 0.98$ の高い内的整合性が確認された。S-24 や SA scale との相関は、 $r = 0.56 \sim 0.74$ となり、併存的妥当性が確認された。200人のデータについて海外と比較したところ、日本人は「日常におけるコミュニケーション」以外のセクション「基本的情報」「吃音への反応」「生活の質」において、セクション得点(吃音による困難度)が有意に高いことが示された。

<成人吃音の治療・支援法確立の研究>

(1) 質問紙を実際の臨床場面へ導入するため、各項目、下位セクション、セクションに対応する形で、現行の吃音治療・支援法を整理した。吃音臨床の歴史において古くから使用さ

れている流暢形成法や吃音緩和法に加え、認知行動療法の要素を取り入れた。

(2) NBAS で測定される「いじめを受けた経験」については、ある者はない者に比べ、OASES-A-J における日常のコミュニケーションの困難度と、流暢性への注意の割合が有意に高かった ($p = 0.034$, $p = 0.035$)。いじめの経験のある者を、さらに友人に庇ってもらった経験の有無によって分類し、いじめ経験のない群も含め3群で比較したところ、いじめられかつ庇ってもらったことがない者は、いじめの経験がない者より、日常でのコミュニケーションの困難度が高いことに加え、自身の吃音へ否定的に反応していた ($p = 0.038$, $p = 0.031$)。また、自助グループへの参加経験がない者はある者に比べて、自身の吃音へ否定的反応を示し ($p = 0.015$)。自己肯定感/自己効力感に關与すると考えられる「人に認められる経験」や「何かに打ち込む経験」は、現在の吃音のインパクトやコミュニケーション態度などと有意に相関していた ($r = 0.22 \sim 0.37$)。いじめ・からかいへの支援、自助グループの紹介、何かに打ち込める経験のサポートが、吃音のある児童・青年への有効な支援となる可能性が示された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計10件)

- 1) 阿栄娜, 酒井奈緒美, 安啓一, 森浩一. シャドーイングの自宅訓練により改善が見られた成人吃音の1例. 音声言語医学, 59, pp.169-177, 2018. 査読有.
- 2) 酒井奈緒美, 森浩一, 金樹英, 東江浩美. 自閉性スペクトラム障害と吃音のある青年へのビデオセルフモデリングの導入. 音声言語医学, 59, pp.27-35, 2018. 査読有.
- 3) Naomi Sakai, Shin Ying Chu, Koichi Mori, and J. Scott Yaruss. The Japanese version of the overall assessment of the speaker's experience of stuttering for adults (OASES-A-J): Translation and psychometric evaluation. Journal of Fluency Disorders. 2017 Mar; 51:50-59. 査読有.
- 4) Shin Ying Chu, Naomi Sakai, Koichi Mori, and Lisa Iverach. Japanese normative data for the Unhelpful Thoughts and Beliefs about Stuttering (UTBAS) Scales for adults who stutter. Journal of Fluency Disorders. 2017 Mar; 51:1-7. 査読有.
- 5) 酒井奈緒美, 森浩一, 北條具仁, 坂田善政, 餅田亜希子. 日本語版 Overall

- Assessment of the Speaker's Experiences of Stuttering から見た「成人吃音相談外来」を受診した患者の特徴と臨床応用への示唆. 音声言語医学, 57, pp.18-26, 2016. 査読有.
- 6) 阿栄娜, 酒井奈緒美, 森浩一. 短期シャドーイング訓練の吃音に対する効果. 音声言語医学, 56, pp.326-334, 2015. 査読有.
 - 7) 酒井奈緒美, 青木淳, 森浩一, Chu Shin Ying, 坂田善政. 日本版 Overall Assessment of the Speaker's Experiences of Stuttering for Adults (OASES)の標準化-言友会における予備的調査-. 音声言語医学, 56, pp.1-11, 2015. 査読有.
 - 8) Chu Shin Ying, 酒井奈緒美, 小倉(青木)淳, 森浩一. 吃音のある成人へのビデオセルフモデリングによる介入の試み-主観的評価で見た有用性-. 音声言語医学, 56, pp.20-29, 2015. 査読有.
 - 9) 酒井奈緒美, 阿栄娜, 森浩一. 吃音のある成人の日常生活における困難:面接調査における実態把握. 国立障害者リハビリテーションセンター研究紀要, 35, pp.1-12, 2015. 査読有.
 - 10) Shin Ying Chu, Naomi Sakai, Koichi Mori. An overview of managing stuttering in Japan. American journal of speech-language pathology. 23(4), pp.742-752, 2014. 査読有.
- [学会発表](計20件)
- 1) 酒井奈緒美, Chu Shin Ying, 森浩一. 成人期における吃音のインパクトと過去の経験との関連. 第44回日本コミュニケーション障害学会学術講演会. 2018-05-12/05-13.
 - 2) Naomi Sakai, Shin Ying Chu, and Koichi Mori. Understanding Impacts of Stuttering Using ICF Model: Individual & Environmental Factors. ASHA Convention 2017, Los Angeles, USA November 9-11, 2017.
 - 3) Shin Ying Chu, Naomi Sakai, Koichi Mori, and Lisa Iverach. Japanese version of the Unhelpful Thoughts and Beliefs About Stuttering (UTBAS-J) Scales: Stuttering versus Control. ASHA Convention 2017, Los Angeles, USA November 9-11, 2017.
 - 4) 灰谷知純, 酒井奈緒美, 森浩一. 成人吃音者に対する、心理面に焦点を当てた認知行動療法的介入の効果研究のレビュー. 第43回日本コミュニケーション障害学会学術講演会. 愛知. 2017-07-08/07-09.
 - 5) 越智景子, 森浩一, 酒井奈緒美, 小野順貴. 吃音者・非吃音者の軟起声の自動評価に基づく短期訓練の検討. 音響学会秋季講演論文集, pp. 421-422, 愛媛. 2017-09-25/09-27.
 - 6) 越智景子, 森浩一, 酒井奈緒美, 北條具仁, 小野順貴: 音響特徴を用いた軟起声自動評価システムの提案とこれに基づく長期訓練の一例. 日本吃音・流暢性障害学会第4回大会, 埼玉, 2016.9.2-3.
 - 7) 阿栄娜, 酒井奈緒美, 安啓一, 森浩一. 在宅シャドーイング訓練により顕著な改善が見られた成人吃音の1例, 第61回日本音声言語医学会総会・学術講演会, 横浜, p.85, 2016-11-03/11-04.
 - 8) 酒井奈緒美, 森浩一, チュウシンイン. 成人吃音支援におけるビデオフィードバック・ビデオセルフモデリングの有効性. 日本認知・行動療法学会第42回大会, 徳島, 2016.10.8-10.
 - 9) 北條具仁, 金樹英, 酒井奈緒美, 森浩一. 重度吃音症例に対する発話訓練と認知行動療法の併用の効果-異なる2つの発話訓練からの検討-. 日本認知・行動療法学会第42回大会, 徳島, 2016.10.8-10.
 - 10) Naomi Sakai, Shin Ying Chu, Koichi Mori and J. Scott Yaruss. The Japanese version of the OASES-A: Translation and psychometric evaluation. 8th World Congress on Fluency Disorders. Lisbon, Portugal, 2015.7.6-8
 - 11) 酒井奈緒美, 森浩一. 質問紙調査から示された不安と吃音への対処法との関係. 第41回日本コミュニケーション障害学会学術講演会. 福岡, 2015-05-16/05-17.
 - 12) 酒井奈緒美, 森浩一. 質問紙による吃音のある成人の類型化. 日本吃音・流暢性障害学会第3回大会, 大阪, 2015.8.29-30.
 - 13) 北條具仁, 角田航平, 坂田善政, 酒井奈緒美, 森浩一. 一成人吃音症例の内省からみた流暢性形成法と認知行動療法の有効性の個人内変化. 日本吃音・流暢性障害学会第3回大会, 大阪, 2015.8.29-30.
 - 14) 酒井奈緒美, 森浩一, Chu Shin Ying. 吃音のある成人一事例へのビデオセルフモデリングの導入. 日本認知・行動療法学会第41回大会, 仙台, 2015.10.2-4.
 - 15) 酒井奈緒美, 森浩一, 金樹英, 東江浩美, 鈴木繭子. 自閉性スペクトラム障害と吃音のある青年に対するビデオセルフモデリングの導入. 第60回日本音声言語医学会総会・学術講演会, 名古屋, 2015.10.15-16.
 - 16) 酒井奈緒美, 森浩一. 吃音のある成人の

評価法の開発-質問紙試案の作成-. 第40回日本コミュニケーション障害学会学術講演会. 2014-05-10/05-11.

- 17) 酒井奈緒美、森浩一、坂田善政、北條具仁、餅田亜希子. 当センターにおける「成人吃音相談外来」を受診した患者の特徴-「コミュニケーション態度」、「社交不安」、「吃音の悩み」の質問紙を中心に-. 日本吃音・流暢性障害学会第2回大会. 2014-08-29/08-30.
- 18) 酒井奈緒美、森浩一、坂田善政、北條具仁、餅田亜希子. 当センターにおける「成人吃音相談外来」を受診した患者の特徴について-日本語版 OASES 試案を通して-. 第59回日本音声言語医学会総会・学術講演会. 2014-10-09/10-10.
- 19) Chu, SY, Sakai N, Mori K, Ide M, Iverach L. Psychometric Evaluation of the Japanese Unhelpful Thought, Beliefs, and Anxiety about Stuttering Scales. American Speech Language Hearing Association Conference. Orange County Convention Center, Orland, Florida, America, 2014-11-20/11-22.
- 20) 酒井奈緒美、チュウシンイン、森浩一、餅田亜希子、北條具仁、坂田善政. 吃音のある成人のコミュニケーション態度: 改訂版エリクソン・コミュニケーション態度尺度(S-24)による調査. 第15回日本言語聴覚学会. 2014-06-28/06-29.

〔図書〕(計2件)

- 1) 小澤恵美, 原由紀, 鈴木夏枝, 大橋由紀江, 餅田亜希子, 坂田善政, 酒井奈緒美. 吃音検査法 第2版. 学苑社. 2016.
- 2) 酒井奈緒美(他17名2番目), 菊池良和編. 小児吃音臨床のエッセンス. 学苑社. 2015.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

酒井 奈緒美 (Sakai Naomi)

国立障害者リハビリテーションセンター

(研究所)・研究所 感覚機能系障害研究

部・研究員

研究者番号: 60415362

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者
なし

(4) 研究協力者
なし